

MEDICAL CAREER TRANSIT

あの日、医療を志した理由をもう一度確かめにいく。



Japan
Heart

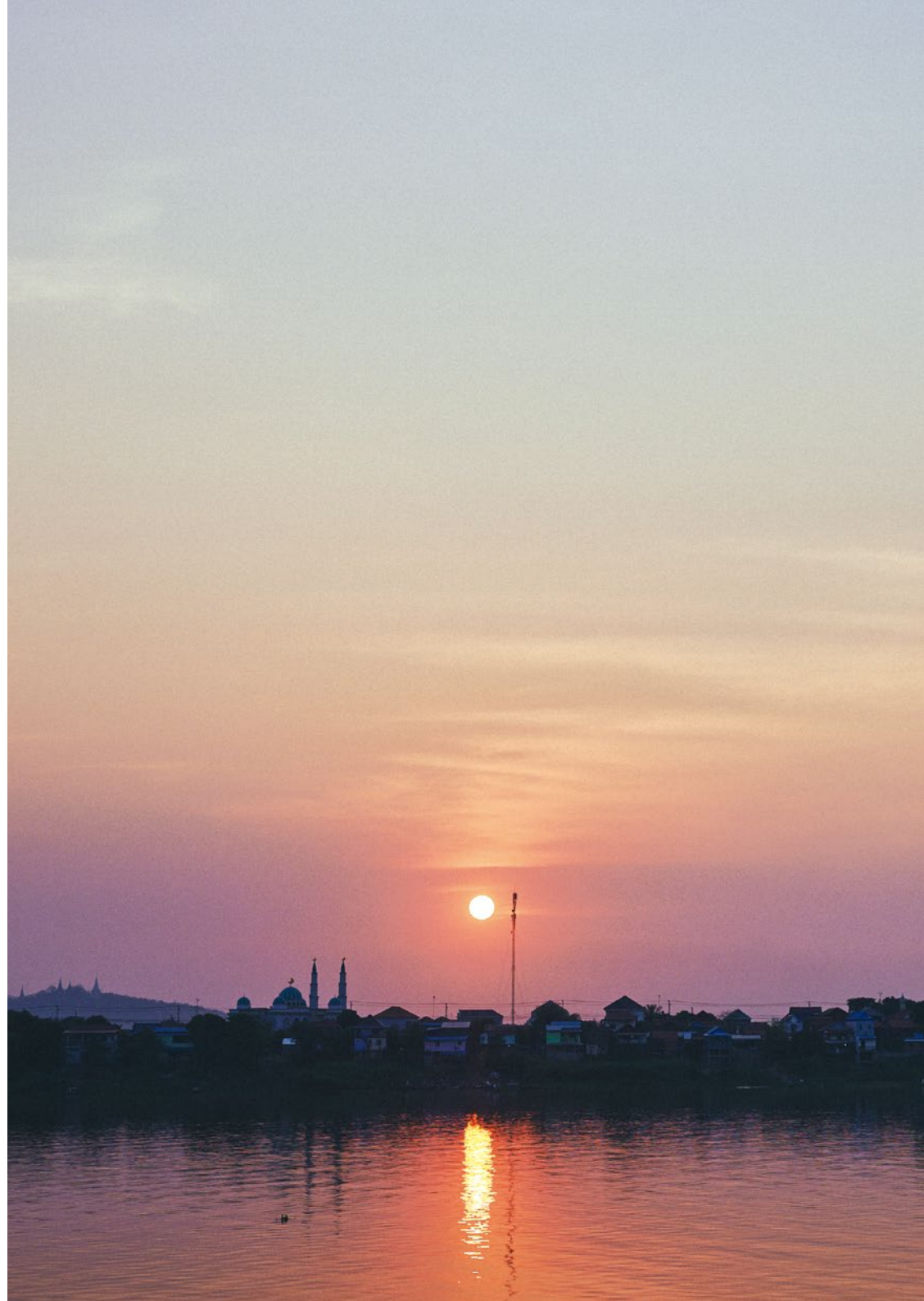
あの日、
医療を志した理由を
もう一度確かめにいく。

小さいころ、マザーテレサに憧れて
看護師になろうと思った。

大学生のとき、バックパッカーで訪れたカンボジアで
現地の衛生環境の悪さにショックを受けた。
途上国・離島医療に少しでも貢献したいと思った。

災害時や途上国の医療など
誰かが動かないといけないときに動ける。
そんな薬剤師になりたいと思った。

始まりは「目の前の人を助けたい」だった。
そうして気づけばわたしたちは、
医療の届かない現場へ足を運んでいた。





ある夏、カンボジアに行くことを決めました。

出国が近づくにつれて、だんだん不安が募ってくる。
食べ物は大丈夫か。感染症にかかりはしないか。
治安はどうか。言葉は通じるのだろうか。

「自分が行かなくても誰かが行くだろう」
そんな思いも浮かんできました。

けれど、いざ現地に行ってみると
自分の不安なんて忘れてしまうくらい
気づけば必死に朝から晩まで手術をしていました。

行ってみないと分からないことがあります。



手術活動中は
朝早くから夜遅くまで
1日50件近くの手術をします。

ボランティアのわたしは、
現地スタッフから指示をいただき
自分ができることを探します。

土埃の溜まった床の掃除をしたり、
患者さんを手術室に案内したり、
停電時は術野を懐中電灯で照らしたり。

「なにかが足りないからできない」ではなく
とにかくできることからやり始めました。



日本では潤沢に使うことができたガーゼも
現地では、1枚1枚作るところからはじめます。

手術と手術の合間に
キッチンペーパーのように薄くなったガーゼを
全部ハサミで切って、次の手術に向けて作る。

軽い傷には、安いガーゼ。
最後の処置は、きれいなガーゼ。

ガーゼの種類も使い分けて、
1枚1枚大切に使うんです。

道具への価値観も、自然と変わりました。



病院で治療を受けに来るための、
タクシーで2ドルの交通費。

その2ドルが払えなくて、
亡くなってしまった小児がんの子どもがいました。

日本円にしたら数百円が、いのちに直結する。
直接、その子のお母さんから伺った話です。

ある患者さんが
病院で息をひき取りました。

ただ、その患者さんの村の風習では、
亡くなったあとは、村に帰ってはいけな

だから、ご家族やご親族たちに
最期に故郷で会っていただくために
あえて診断をせず車で村に搬送しました。

そのまま病院で亡くなるのか、
それともご家族、ご親族のもとへ返すのか。

こうした文化の違い、ご家族の気持ちも
チームで話し合っています。



自分はなににもできていないと落ち込んでいたとき、
尊敬するミャンマー人の看護師が教えてくれました。

これまでにここを訪れた、たくさんの日本人が
技術を教えてくれたこと。知恵を託してくれたこと。

わたし一人で頑張るんじゃない。
わたしの役目は、この地で医療を繋ぐことだった。

未来へ、今日も、医療を前に進めるために。
再び自分のやるべきことが見えました。

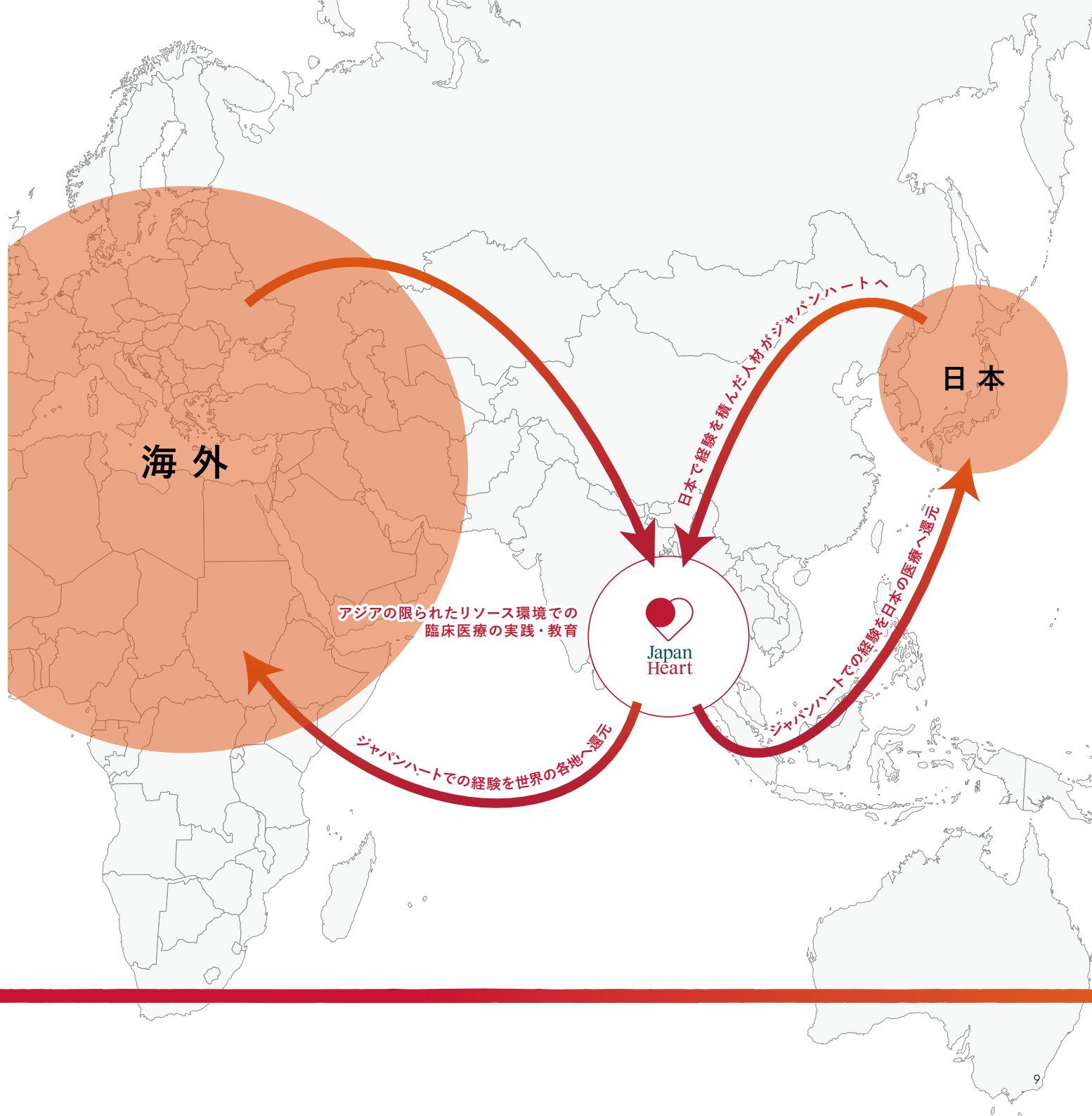


ジャパンハートと描く、 新しい医療人の道。

ジャパンハートが目指すのは、日本とアジア、そしていずれは世界のすみずみに医療を届けていくこと。そのためには、多くの医療従事者の方々のお力添えを欠かすことはできません。医療が充分に発展していない場所で、本当に医療を必要とする方々へ医療を届ける経験は、医療の原点に立ち返る、医療人として代えがたいキャリアにもなるはずです。ジャパンハートを、あなたの医療人キャリアの「トランジット」として使ってみませんか。

海外での医療活動を体験されたい方は、まず短期間から参加できるツアー・体験コースにご参加ください。「メディカルチーム(*)」は半年以上の活動期間であり、ジャパンハートの一員として海外医療に従事します。「スタッフ」は基本的にメディカルチームの活動を終了された方が対象となります。(*海外医療現場のために活動するメンバーの総称)

国内のトランジット先としては、小児がんと向き合われるお子さんとご家族の思い出をつくる事業であるスマイルスマイルプロジェクト(SSP)、離島・へき地へ看護師を派遣するプロジェクト(RIKAJOB)、ジャパンハートの国際緊急救援事業(iER)の3つの活動先がございます。



限られた医療資源と日本とは異なる文化を充分に考慮した上で、自身の経験、専門性、強みを活かし、現地人と共にチーム診療を行います。現地の若手医療者に対するエビデンスに基づいた指導、レクチャー、カンファレンスやトレーニングの企画・実施。持続可能な方法を考慮した介入が求められます。

参加者の声

短期ボランティア・長期ボランティア（現 メディカルチーム）医師（小児科・小児集中治療科）

水野 智子 / Tomoko Mizuno

〔参加歴〕

2014年：短期ボランティア（カンボジア）

2018年：長期ボランティア（カンボジア）

2024年：長期ボランティア（カンボジア）

日本であればもっと軽度の状態で医療機関を受診しているような患者さんが、とんでもなく進行した状況でチャリティの病院にやってくる。しかも、薬剤や医療器具のリソースが限られている中で、衝撃的なくらいたくさんの方が押し寄せてくる。制限がある中でも、なにがベストなのかをスタッフで話し合い最善の医療をする。そこには、ご家族の宗教観や価値観も含まれます。たとえば、カンボジアでは日本よりもご自宅でお看取りをしたいというご家族がたくさんいらっしゃいます。どういう形で最期の時間を過ごしていただくか、チームで話し合い決定する。これは日本でも同じことだと思うんです。患者さんの価値観を大切にしたい医療を届けたいと思っています。

ジャパンハート認定医 医師（消化器外科）

遠藤 俊治 / Shunji Endo

〔参加歴〕

2013年：短期ボランティア（ミャンマー）

～ 2024年：毎年ジャパンハートの活動に参加* *コロナ禍については活動自粛

「週末を使った数日間の参加でもいい」。ある学会の講演会でその言葉を吉岡先生からお聞きして、わたしはその日にジャパンハートの短期ボランティアに申し込みました。それまで、国際医療への参加はハードルが高かった。けれど、初めてミャンマーの地に足を踏み入れて以来、ジャパンハートへの参加回数は19回になります。理由は、医療の原点に戻りたくなるから。やり遂げた先で、患者さんからも感謝していただける、喜んでいただける。ボランティアは、自己満足ではないと言われることもありますが、それでもいいと思うんです。行ってみて、やれることからやる。そこにやりがいや楽しさを感じる。1回目に参加したときから思っていることです。

参加方法

募集説明会（任意）

▼ ご応募

体験コース

▼ ご応募

メディカルチーム

▼ ご入職

スタッフ

詳細はこちら



コメディカル



薬剤師、臨床検査技士、放射線技師、管理栄養士などの医療者を、コメディカルスタッフと総称しています。独力で担当部署の業務を担当でき、現地人医療者と協力して業務改善ができる能力が求められます。

参加者の声

長期ボランティア（現 メディカルチーム）薬剤師

山川 貴生 / Takao Yamakawa

[参加歴]

2023年：長期ボランティア（カンボジア）

ジャパンハートで使用する薬剤や医療機器は、寄付金で賄われています。月に数百万円のお金でそれらを発注する。購入した薬剤に期限切れがないか、必要最低限のものは揃えられているか在庫管理をしながら、抗がん剤などの調剤も行います。ご支援いただいているからこそ、わたしたち薬剤師はしっかり役目を果たす必要がある。そこは常に意識している点です。医師や看護師と比べると、患者さんに対して直接処置をする機会は多くありませんが、現地で働かされているスタッフやボランティアの方々は素敵な想いを持っている方がたくさん集まっています。その医療者たちに貢献することが、薬剤師のやりがいでもあります。災害時など、誰かが動かないといけないときに動ける薬剤師でありたい。このボランティア期間は家族からも応援されている2年間。限られた時間の中で、一生懸命走りきりたいです。

参加方法 *管理栄養士はフローが異なるため、ご希望の方はお問い合わせください

募集説明会（任意）

▼ ご応募

短期ボランティア

▼ ご応募

メディカルチーム

▼ ご入職

スタッフ

詳細はこちら



看護師 (ツアー)

医療現場の視察や医療活動の体験をするほか、現地で活動しているスタッフ、患者さん、異なるバックグラウンドを持つ参加者と交流します。5日間のプログラムの中で、世界の医療の現状を知り、医療が届かない場所で失われてゆく「いのち」を一つでも多く繋ぎとめる医療現場を、短期間で経験していただきます。

参加者の声

ツアー看護師

君嶋 友梨 / Yuri Kimishima

[参加歴]

2023年：看護師ツアー (カンボジア)

看護師としての生き方に悩んでいた時期でした。次の選択肢として、地元の病院で働くか、それとも他の選択肢があるのか。その答えを探しながら、奄美大島で働き始めていた頃でした。着任して3カ月が経ったころ、吉岡先生やジャパンハートの看護師さんたちと出会います。吉岡先生が語られていた看護師さんたちへの想いと信頼。「この現場を終えたら、彼女たちは次にコロナのクラスター発生現場に行くんだ。その次はカンボジアに行くんだ」。漠然とですが、その姿がかっこよかった。この団体で働いてみたい。そう思って、病院長にお休みをいただき、1週間のツアーに参加することを決めました。

ツアー看護師

堀米 亜樹 / Aki Horigome

[参加歴]

2014年：スタディツアー (ミャンマー) (現 看護師ツアー)

2015年：短期ボランティア (ミャンマー)

2023年：看護師ツアー (カンボジア)

20代はフリーターでした。手に職をつけようと思い、33歳で看護学校に通い始めたんです。看護学生だったころ、図書館に行った際に吉岡先生の本を見つけました。読みながら、わたしは国際医療や国際保健をやりたいかたかもしれない思い出しました。ただ当時は、できる自信がなかったんです。国際医療には英語が必要だったり、オペ室勤務や救命救急を経験しないといけないと思っていました。でも、吉岡先生の本には志があれば誰でもできると書いてあった。たとえオペ室に入れなくても、自分にできる国際医療の形があるんだと気づきました。実際に、現地ではたくさんの医療経験をしましたが、なにより同じ志を持つ仲間と出会えたことが嬉しかったです。今でも仲間とは連絡を取り合いながら情報交換をしたりしています。わたしが今も挑戦する励みになっています。

参加方法

募集説明会 (任意)

▼ ご応募

看護師ツアー

詳細はこちら



看護師（メディカルチーム・スタッフ）

現地スタッフと共にジャパンハートの一員として活動を行います。物資や人材が充分でなく、刻々と状況が変化する活動地です。その環境下で現地人と協働しながら、患者の看護に必要な情報収集・的確な問題抽出を行い、看護計画を立案、実行する看護実践能力が求められます。

参加者の声

コース看護師（現 メディカルチーム）

中村 夏海 / Natsumi Nakamura

[参加歴]

2022年：コース看護師（山形・ミャンマー・カンボジア）

活動中、初めて子どもの死に立ち会いました。オペ中に状態が不安定になり、術後から呼吸ができなくなってしまったんです。人工呼吸器もなく、3人の看護師で寝ずに交代しながら、手動のポンプ式の呼吸器で数日間息を繋ぎました。悲しいだけでなく、この経験は無駄にしないと誓いました。

コース看護師（現 メディカルチーム）

久島 萌美 / Moemi Hisajima

[参加歴]

2023年：コース看護師（山形・カンボジア）

農村部の病院で、日本人はわたし一人。日本だったら医師に指示を仰いだり、処置の判断を委ねたりできます。ところがいざ自分が一人になって患者さんを見ることになると、処置ひとつの判断も責任はわたしにある。日本では背を向けていた自分の弱みに向き合わなくてはいけない環境です。

カンボジア事業スタッフ・看護師

鰐川 音寧 / Nene Wanikawa

[参加歴]

2021年：国際看護師研修（現 メディカルチーム）

2023年：事業スタッフ（カンボジア）

医師や看護師がいても、体調が急変した患者さんを救えないこともある。泣き叫ばれるご家族もいます。自ずと、わたし自身の看護師としてのなりたい姿や、これから何を経験する必要があるのかを見つめ直さなきゃいけない。心に寄り沿った医療がしたい。そう思って始めた仕事だと今では分かります。

参加方法

募集説明会

▼ ご応募

オンライン個別相談 or ナースラウンジ or 看護師ツアー

▼ ご応募

メディカルチーム

▼ ご入職

スタッフ

詳細はこちら



RIKAjob (離島・へき地医療看護師支援事業)



RIKAjobとはジャパンハートがプロデュースする「RITOU(離島・へき地)、IRYO(医療)、KANGOSHI(看護師)」支援事業です。看護師として生きていくためのキャリアアップと、離島・へき地への医療の提供。自分も誰かも共に豊かになる新しいライフスタイルを模索できる環境です。

参加者の声

RIKAjob 事業立ち上げ者・看護師

伊藤 千晶 / Chiaki Ito

[参加歴]

2012年：国際看護長期研修(現 メディカルチーム)

2017年：吉岡先生の秘書

2018年：RIKAjob 事業の立ち上げ

2024年：メディカル HR セクション RIKAJob 担当

「離島の医療を担う看護師が、全然足りていない」。吉岡先生の講演でたまたま奄美大島に行った際に、現地病院の人から伺った一言です。派遣会社を利用すると、普通の看護師さんの給料の1.5倍をお支払いする必要がある。一方で島を守っている医療者は、限られた資産で必死に病院を良くしようとしている。本来は一円も無駄にしたいはありません。加えて、離島・へき地での医療は、ルーチン化が難しい中で患者さんに向き合う必要があります。ジャパンハートに訪れる看護師さんは志が高く、成長意欲もある。離島・へき地の病院への派遣は、看護師の皆さんのキャリアアップにも繋がり、地域の力にもなれる。ジャパンハートとしても事業を立ち上げるメリットがあるのではないかと確信しました。もちろん不安はあるでしょう。だから、年間40～50件ほどオンラインで話をする中で、わたしのこれまでの経験をお伝えしています。若く情熱のある看護師の方が一歩を踏み出すお手伝いも、確かにできていると感じています。

参加方法

募集説明会

▼ ご応募

オンライン個別相談 or ナースラウンジ

▼ ご応募

RIKAjob

詳細はこちら



スマイルスマイルプロジェクト (SSP)



スマイルスマイルプロジェクト (SSP) では、小児がんの子どもと家族の旅行・外出に、ジャパンハートの医療者が付き添い、旅行や思い出づくりのサポートを実施。疾患や治療の影響により移動に不安のある子どもと家族に、旅行・外出先で安心のある、かけがえのない時間を過ごしていただきます。

参加者の声

SSP サポーター看護師

内藤 雅 / Miyabi Naito

[参加歴]

2018年：ジャパンハート学生カンボジアツアー、SSP サポーター（ボランティア）

本職のお休みの日に、ボランティアとして SSP サポーターに参加しています。患者さんとおでかけする日もありますが、ウェルカムボードや旅の葉などを制作するボランティアもあるんです。当日に行けなくても、事前にお子さんの情報をいただいて、その子が喜ぶ顔を想像しながら作る。とても幸せだなと感じます。学生ツアーに参加していた際、吉岡先生が「ジャパンハートの医療活動は自分のためにやっている。いのちを救う、そこに自分は存在意義を感じる。それが幸せだ。」とおっしゃっていました。今の活動は、その話に結びつきます。SSPの活動をしてから、普段の業務でも、目の前の患者さんに少しでもなにかできることはないかと考えるようになりました。

SSP 看護師

山田 友恵 / Tomoe Yamada

[参加歴]

2018年：国際看護師研修（現 メディカルチーム）

2019年：アドバンスドナース制度（現 メディカルチーム）

2020年：SSP スタッフ

わたしがようやく一人で企画を担えるようになったとき、一緒におでかけしたご家族がいました。その旅行から1年後、そのご家族から再びご依頼をいただきました。「今度は予後が短く、おそらく最期になるから行きたい」。お子さんのご体調を配慮した楽しみ方で、たくさんの思い出を一緒に作りました。その1カ月後、その女の子は亡くなったとお母様から連絡がありました。「亡くなったことは悲しい。けれど、最期にやりたいことをやらせてあげられた、娘の笑顔をいっぱい見ることができた」。その事実がお母様を強くしたのだと思います。家族だけでは行けない、医療者がいるからこそ行けると言っていただくこともあります。この活動をやり続ける意義はここにあると信じています。

参加方法

SSP サポーター登録説明会

▼ ご応募（個別面談はご相談ください）

SSP サポーター

▼ ご入職

SSP スタッフ

詳細はこちら





ジャパンハートのiER (International Emergency Relief) 事業は、大規模自然災害や感染症拡大などの緊急事態において、医療の観点で必要な支援を迅速に届けます。国際緊急救援チームは、ASEAN 圏内（ミャンマー、カンボジア、ラオス、フィリピン、インドネシア、タイ）及び日本国内で災害が発生した際に、医療チームを派遣し、被災地での医療支援を行っています。

参加者の声

iER パートタイム / iER ボランティア看護師

栢田 真弓 / Mayumi Masuda

[参加歴]

2018年：短期ボランティア（カンボジア）、iER ボランティア、西日本豪雨支援
インドネシア・スラウェシ島地震支援

2019年：Dream Train 里親、SSP サポーター

2024年：能登半島被災地支援、iER スタッフ

「一旦は、この日をもって活動を終了します。けれど、またなにかあったらいつでもご連絡ください。すぐ来ます」。被災地での活動を終えるときに、被災者の方々にかける言葉です。その言葉をかけられた方々は、まずは自分たちで頑張ってみよう、どうしても困ったらここに助けを求められるんだと、安心材料になると思うんです。被災地に対しては、最大限の救援はしても、その後の自立まで妨げてはいけません。わたしたちも、別の災害への備えもする必要があるから、毎日寄り添うことはできません。そんな状況の中でも、支援終了後、ときどき現地を訪れて、言葉をかける。長期的な関わりを持つことに感謝していただくこともあります。他の団体にはない寄り添い方が、ジャパンハートらしい救援だと思っています。

iER ボランティア看護師 / 元スタッフ

宮田 理香 / Rika Miyata

[参加歴]

2015年～2023年：スタッフ看護師

「声なき、声をつかむ」というスローガンで、災害医療チームで活動をしていました。「助けてくれ」とSOSの声を出す人たちだけではなく、声を出せない人たちにも手を差し伸べる。コロナ禍で支援を始めた当時、あまりに未知のもので、みんな怖がっていた。ジャパンハートの医療者も感染症のブロではない。でも、なにか困っている人がいたら、そこへ向かっていく。吉岡先生がよくおっしゃっていました。「みんな時間だけは共通に持っている。ただ、時間は減っていくばかりで増えることはない。そんな中で残りの時間をどう使うか。ぼくは、逃げるためではなく、立ち向かうために使う」。その姿勢にわたしも共感をしたから、活動を続けられたんだと思います。

参加方法

iER 登録説明会

▼ ご応募

iER ボランティア登録研修

▼ ご応募

iER ボランティア

▼ ご入職

iER スタッフ

詳細はこちら





2004年、創設者・吉岡秀人（小児外科医）が自身の長年の海外医療の経験をもとに、医療支援活動のさらなる質の向上を目指して設立した「日本発祥の国際医療 NGO」。東南アジアを中心とする国内外で、小児がん手術などの無償の高度医療を含む治療を年間約35,000件実施しており、累計数は30万件を超える。（2024年3月時点）

VISION

すべての人が、
生まれてきて良かったと思える
世界を実現する。

Build a world where everyone can be grateful
for the gift of life.

MISSION

医療の届かないところに医療を届ける。

To deliver healthcare to medically-isolated areas
私たちは、出会えた一人ひとりの輝く人生のために、
治療を超えた医療の可能性を追求し続けます。



特定非営利活動法人 ジャパンハート

International Medical Volunteers **Japan Heart**